

はじめに

江戸時代後半期(維新の約六〇年前、十一代将軍家斉の時代)、ロシア測量船の艦長ゴロウニンは、国後島で幕府の出先機関によって捕えられた。樺太等の北方各地で日本人を襲ったロシア士官に対する報復措置であった。副艦長であったリコルドは、艦長を救出するため、足かけ三年にわたって日本側と必死の交渉を行い、ついに成功した。これはその時のリコルドによる記録である。

日露当局者の交渉過程、両民族の考え方の違い、間に立った日本の民間人、なかでも高田屋嘉兵衛の活躍、当時の北方諸島での日本人の活動状況などについて、興味深い資料となっている。双方が疑心暗鬼の内に交渉を重ね、嘉兵衛の仲立ちによって交渉はまとまり、そのあとの日露国民の交歓の様子は感動的でもある。

原典は、岩波文庫のゴロウニン著、井上満訳「日本幽囚記」下巻(全三巻)(1996年10月8日発行第7刷)の後半部分である。

ゴロウニン救出記

ピョートル・リコルド著

井上満訳

目次

第一回航海

第二回航海

第三回航海

(文中、★印は原註、*印は訳注)

第一回航海

国後島で日本側に艦長ゴロウニンが捕わる——本艦抜錨し要塞へ接近——日本側我に向
い砲撃開始、わが方応戦、一砲台は撃砕、主要塞には何等損害を与え得ず——日本側と
交渉を企て、失敗——本艦を拿捕しようとする日本側の奸計——一本の手紙と捕われた同
胞の所持品若干を陸岸に残し、オホーツクへ向う——オホーツク着、イルクーツクへ出発、
道中の危難——翌春、日本人良左衛門を伴い再びオホーツクへ帰る——本艦の航海準備、
カムチャツカより護送された日本人六人を引取り、国後島へ——聖イオナ島附近で難破に
瀕す——背信湾到着——対日折衝開始を企て失敗——良左衛門の頑迷さと執念深さ、わ
が同胞は殺害されたと良左衛門言明——送還した日本人を陸岸に放つ、他の日本船から
船長以下の日本人を捕える、わが同胞生存を船長より知る——捕縛した日本人を伴い国
後島発、無事カムチャツカ到着

一八一一年七月一日(わが文化八年六月四日)は、*九月から起算する古い習慣に従って
数えても、ユリアス月の一日に当るが、この日の午前一時にわれわれはあの悲痛な事件に見
舞われた。それはスループ艦ディアナ号の全乗組員に生涯消えることのない記憶をのこし、今後も
思い出すたびに痛恨の情新たなものがあるであろう。

* 九月から起算する古い習慣——一七九三年一〇月五日から施行されたフランス革命暦を
さす。この暦法は一八〇六年に廃止されたので、本書起草当時(一八一五～一八一六)か
らは古い習慣であった。

読者も御承知の通り、ゴロウニン艦長の身にふりかかり、われわれを深刻な悲哀にたたきこみ、気
も顛倒するほどの困惑に陥入れたあの災厄は、全く思いがけもない出来事であった。千島諸島測
量のためカムチャツカを出航する時からわれわれの楽しんで来た、今年中にも祖国に帰れるとい
う甘い考えは、この災厄のためすっかり壊れてしまった。というのはこの宿命的な打撃がわが敬愛す
る艦長と五年間の同僚たちとを、世にも怖い仕方でわれわれと別れさせた時には、もう誰ひとり自
分の親戚知友の許に帰ることを考える者もなく、全員しっかりと神にすがって、士卒の別なく全乗組
員が心を一つにして、同僚たちが生きているならばこれを救出するめ出来るかぎりのあらゆる手段
を尽さないかぎり日本の沿岸を去らず、たまたもし(時々われわれの想像したように)同僚たちが殺さ

れていたら、この同じ日本の海岸で正当の報復を加えないかぎり、ここを去らないぞと決心したからである。

ゴロウニン氏と同行の上陸組が、多数の人間と、色さまざまな立派な服装からして相当の日本役人と覚しい連中に伴われて城内に入るまで、私は本艦に残って望遠鏡で見とどけていた。そしてゴロウニン氏と同じ原則に従って、日本側の背信行為など少しも疑わず、その行動の誠実さを信じきって眼がくらんでいたものだから、私は日本人たちが善良な訪問者としてゴロウニン氏と共に来艦する場合に備えて、艦内を何彼とよく整頓していた。そうした作業の最中、正午頃、突如として陸岸に銃声が聞え、同時に大変な叫喚をあげて群衆がどよどよと城門を出てゴロウニン氏らの乗って行ったボートの方へまっすぐに駆け寄って来た。望遠鏡で見ると、列を乱して駆けつけた群衆がボートの上からマストや帆やオールやその他の備品をめちゃくちゃに引き出している様子が、まざまざと分った。そうするうちにこちらの水兵が一人アイヌたちのため手籠めにされて、城門の中へ連れて行かれるのが、われわれに見えた。あとの群衆も城門へ駆けこんで、後ろの門をびたりと閉めた。するとその瞬間にあたりはシーンと静まり返った。部落は海に面する方をすっかり幔幕を張りめぐらしているのだから、部落の内部で何が起っているかは見る事が出来ず、外部にはもはや誰ひとり姿を見せる者もなかった。

日本側のこうした暴力を見せつけられると、城内に残った同僚たちの運命が全く判らないで、それがわれわれの想像を惨酷に虐げるのであった。その時の気持は、私が書くよりも、むしろわれわれの立場にたって考えて頂いたら、誰しもよく判るであろう。日本の歴史を読んだことのある者なら、復讐心の強い日本人の風習から、われわれとして何を期待すべきであったかを、容易に想像できるであろう。

私は寸刻の猶予もなく抜錨を命じ、本艦を陸岸に近づけた。(日本側では近々と軍艦を見たら、考えを改めて接衝を開始し、彼らのために生け捕りにされた味方の者の引渡しに同意するかも知れない)と考えたからである。しかし間もなく水深が二尋(サージェン)半に減ったため、やむなく本艦は市から相当の距離のところまで停止した。ここからでは、砲弾は市に届くには届くけれども、甚大な損害を与えることは出来なかった。

そして本艦が戦闘準備を行っている時、日本側は山上に設けた砲台から発砲した。その砲弾は

本艦より少し遠目に落ちた。あらゆる文明国の尊敬を受けながら、今このような凌辱を蒙った祖国の軍艦旗の名誉を守るため、またこの行動の正しさを確信して、私は市中に向って実弾射撃を命じた。本艦からは約百七十発を発射し、上記の山上の砲台を撃破することが出来た。ただしこれでは、海に面する方を土塁で囲んだ本陣には所期の損害を与えず、同様に日本側の砲撃も本艦に対して何の損傷も加えていないことに気づいた。だから私はこれ以上この状態を続けることは無益だと判断し、射撃中止と抜錨を命じた。日本側は本艦の射撃中止に勢いついたらしく、本艦が市から離れて行く間じゅう、盲滅法に射撃した。

本艦の残留者は総数五一名にすぎず、上陸を決行できる充分の兵力がなかったので、われわれは不幸な同胞救出のために何ひとつ決然たる対策を講じ得なかった。幾つもの大洋を渡るたびに、気候が変るたびに乗組員一同のことをあれだけ気遣ってくれた敬愛する艦長以下の乗組員を奸策にかかって失い、あるいは世にも恐るべき虐殺を受けているのではないかと想像すると、乗組員一同は痛憤やるかたなく、城の真っ只中に飛びこんで、報復の手をふるって同胞を救出するか、またはわが生命をすてて狡猾な日本側の犠牲となるか、いずれにしてもこの背信行為に復讐したいと逸り立ったのである。

この人々がこの気持でおれば、狡猾な敵に対し大損害を与えることも困難ではあるまいが、そうなれば本艦を守る者はなく、本艦は苦もなく敵の砲火を浴びるであろう。そして事の成否をとわず、われわれの企図は一切、永久にロシヤ本国には知れず、かつは今回の南部千島測量中にわれわれの蒐集した資料も、さらにこの地方測量に費した多大の時間と努力も、何ら所期の貢献をもたらさないであろう。

われわれは更に市から遠ざかり、陣屋の砲弾の届かない距離に投錨したが、その間に生捕りにされた艦長あてに一通の手紙を書くことにした。われわれはその手紙に、艦長はじめ同僚を失ったことが如何に痛嘆にたえないことであるか、国後島の長官の行動が如何に不当で国際法に反するものであるかを述べ、今は上官に報告のためオホーツクへ向うが、艦長以下を救う手段が尽きたら全員一致して生命を投げすてる覚悟であると知らせておいた。この手紙には士官全部が署名し、港内に浮べた桶の中に入れた。それから夕刻までに錨索によって更に本艦を陸岸から遠ざけ、敵の不意打ちに備えて一夜をすごした。

* 朝になって望遠鏡で見ると、市中から駄馬で家財道具を運び出していた。きっとこちらで何とかして市街を焼き払う計画があると心配したのであろう。午前八時、遺憾至極であるが、職務上の必要に従い、自分が最先任者であるため、私はスループ艦と乗組員の指揮権をとった。そして残留全士官に対し、各自最善と思う同胞救出策を書面にして提出するように求めた。その共通の意見は次の通りであった。

* 朝になって——この日の様子は国後島調役奈佐瀬左衛門政辰の文化八年七月附「再調御用状」に次のように出ている。

「同五日(露曆七月一六日)になっても異国船は滞船し、昼頃またぞろ橋船一艘を乗出し、沖間へ浮桶と紛失した凶合船とを差出してきたが、最早や大砲を撃ち合った上のことであるから、策略でもあるかと判断し、当方よりは、取入れ船をださなかつた。」(「通航一覽」卷二九八)

「敵対行為を続けたら捕われた者たちの運命が一層悪くなり、もしまだ一同が生存しているならば、日本側でそのために生命をも奪うことになるかも知れない。だから敵対行為を中止して、オホーツクに行き上官にこの件を報告すれば、上官は捕われた一同が生存しておればこれを救出するため、もし殺害されていたら日本側の狡猾さと国際法違犯に報復するため、適確な手段を選ぶことが出来る」

* 翌払暁、私は航海士補スレッドニイ君をボートに乗せ、昨日入れておいたこちらの手紙を持って行ったかどうか、港内に浮んだ桶を見させにやった。しかし同君はその桶のところまで行かないうちに、市内で太鼓の音が聞えたので、(市中から小舟を出して攻めて来はしないか)と考えて、立戻って来た。果して一艘の小舟が漕出して来るのを認めたが、その舟は陸岸から僅か離れたばかりで、黒の信号旗のついた桶をまた一つ置いて行った。これを見ると、(あの桶には手紙なり何なり、わが同僚の運命を知る手掛りが見附かるかも知れない)と考えたので、本艦を市街に近づけ、更にもちからもボートを出して桶をあらためる心算で、抜錨したが、間もなくその桶には綱をしばりつけ、その一端を陸岸に置いて、その綱をそっと手繰っていることに気がついた。彼らはこうしてこちらのボートを釣りよせて、捕獲するつもりだったのだ。われわれはその奸策を見破ったので、直ちに錨を下した。

* 翌払暁——前掲「再調御用状」の続きには、

「同六日になったが、露船は寄り来る様子も見えなかった。暫く帯船する様子であった。南部藩家人は昼夜一〇日も張詰め、身体も疲れた様子に見請け、会所の者共も同様に見えたので、加勢人が到着するまで、そのまま釣置く策略にもなると考え、当方より浮桶を差出した。もしこれに露船が大砲を打掛けるなら、取押えた者八人を海岸において打果そうと考えた。大砲は打ってこなかったが、近寄っても来なかった。九つ時過ぎになってケラムイ番屋へ向け、橋船が一艘乗出してきた。遠目鏡で見たところ、霧深く見分け難く、さりながら上陸した様子かと思われたがすぐ漕戻ってしまった。蝦夷人円蔵が部下をやって見させたところ、テレケウン番屋前の海岸へ箱一つ、革袋物包三つ、都合四つを置き、同所番屋が草中へ隠し置いた玄米八俵、薬罐一つ紛失していると報告した。同日夕方露船は沖間へ走り出したので、昨五日差出した浮桶を取り寄せて見ると、異国文字で書いた書状が一枚あり、外には何もなかった」(前同)。

なお「甲子夜話」にあげた「文化八年七月或書状」によると、フィラートフ少尉の残して行った品目は次の通り。

「その後で残していった雑物を改めると、水豹袋一、羊角袋一、錠前付箱一、琉球包一。内容物は、本三冊、頭巾四、箱入髭剃刀九、浅黄紙二枚、曲物二、ケリー足、羅紗股引一、櫛一、沓六、ぱっち二、足掛二、肌着一六、かがみ一、羅紗胴着一、小風呂敷七、櫛払二、下もも引き六、肩掛七、もも引き四、胴着四、鋏一、下着一〇、足下け掛け一〇、小切一〇、油少々、諸書物一口、右肩掛け一、羅紗大切一、筒袖着物二、計二九品、八人の者共の衣類手道具であった由」(「通航一覽」卷二九八)

わが不幸な同僚たちが日本側の背信行動の犠牲となってから、一同の運命はわれわれには全く判らなくなった。だからこちらでは一寸でも手掛りがあれば、彼らの身の上を知りたいという希望を捨て得なかった。一方では、(アジヤ的な復讐心がここまで野放図になったからには、日本側でもいつまでもわが囚人を生かしては置けまい)とも考え、また一面では(誰しも殊のほか慎重だと賞讃する日本政府だから、むろん活殺自在の七人の人間に復讐しようと決心はすまい)とも判断した。こうして五里霧中に陥ったわれわれは、日本側に向って「こちらでは同胞は生存せるものと認め、かつ

他の文明国と同様に日本においても捕虜の生命が保証されるものとは想像できない」という意味を表示する以外には、何の良策も思いつかなかった。

そのため私はフィラートフ少尉を、岬の上にある住民の逃げ去った部落に派遣し、かねて用意したとおり、士官の分は一人一人別々に荷造りして名札をつけたシャツ類と剃刀と少しばかりの書籍を、水兵たちには一括してシャツ類を、残して来いと命じた。

*一四日(わが六月四日)本艦は悲痛な気持ちで、背信湾(スループ艦ディアナ号の士官たちはこの湾をいみじくもこう命名した)を出帆し、最直線コースを辿ってオホーツク港に向ったが、途中ほとんど濃霧がかかり通しであった。しかしこの航海を幾らか不快にしたのは曇天だけであって、風は順風でしかも適度に吹いていた。しかし静かな風に乗って、憎々しい国後島に見える沖合を数日間航海した時には、私の心の中では世にも恐ろしい嵐が吹きすさんだのだ！しかし時がたつにつれて微かな希望の光明が、消沈した私の心をはげましてくれた。私は(われわれはまだ永久に同僚と別れたのではないぞ)という希望を抱いていた。私は朝から晩まで望遠鏡を覗いて海岸をくまなく眺めながら(あの中からせめて一人でも神意に導かれ、独り木舟にでも乗って、恐ろしい幽囚の憂目から逃れて来る者が見えはしないか)と望みをかけていた。しかし本艦が東大洋(太平洋)の水域に入って、濃霧を通すわれわれの視界が僅か数尋しか及ばなくなると、私はこの上もない暗い考えに囚われ、夜も昼もさまざまな妄想を描き続けるのであった。

* 一四日——前掲、奈佐瀬左衛門の「再調御用状」には次の通りある。

「同七日朝、異国船は湾内を乗出し、ケラムイ岬を回って、次第に帆影も見えなくなった。滞船は都合十一日であった。昨六日テレケウンへ置いていった包物や箱を開き、改めたところ、箱の内は書ものばかりで、包物の内には着替類や手道具のみであった。……沖合に残った凶合船も取入れてみたが、品物もなく人もいなかった。……その後は一向帆影は見えなくなった」(「通航一覧」卷二九八)。

私はわが友ゴロウニンが五年間占領していた、あの部屋で起居していた。この部屋の中の物品は、あの不運の陸岸に出発する当日、彼自身の置いたままになっていて、ついさっきまで彼のいたことを、まざまざと思い出させるものばかりであった。報告のため私のところへやって来る士官たちは、癖になっているものだから、つい誤って私に向ってゴロウニン氏の名を呼ぶことが度々であった。そ

うした誤りにつけても、あの痛惜の情が蘇って、士官たちも、私も眼に涙を浮べる始末であった。この私の心を苛んだ苦悩と云ったら！ たった一人の不遜な男が無謀な行動をしたために破れた、日本との善良な協定を復活する可能性があると思われ、ゴロウニン氏とも話し合ったのは、ついこの間のことではないか。そしてその成功を考えて、われわれ二人は喜び合い、わが祖国のために貢献できるのだと意気揚々としたものがあったのに、案に相違して何という惨酷な変り様であろう！ゴロウニン氏と二人の優秀な士官と数名の水兵とが、惨忍なキリスト教迫害だけでヨーロッパに名を知られた国民のために、われわれの仲間から切り離され、しかも一同の運命はわれわれからは見透しもきかない幕に包まれているのである。こう考えて、私はオホーツクまでの道中、ずっと絶望に陥っていた。

それから無事に十六日間航海して、われわれの眼前に、オホーツク市の建物がまるで大海の中に建ったように見えて来た。★新築の教会堂は市内のあらゆる建物を圧して、一等高く美しく見えた。市街の建設されている低い岬、いやむしろ海中の洲は、建物をすっかり見た上でないと、眼前に開けて来ないのである。

★ われわれはもう久しいこと、神殿を見る慰めを失っていたのだ！ こうしたキリスト教の建物の光景は、あらゆる航海者に、ことに災厄のあとでは、云い知れぬ喜びを与えて、力づけ、新しい船着場の住民たちに好感を抱かせるものである。

私は港内のいざこざに時間を費さず、急いで用件を片づけたいと思ったので、国旗掲揚の際に号砲を射てと命じ、陸岸から来る水先案内を待つ間、本艦を流しておいた。すると間もなく港務部長のところから、本艦によい場所を示せという命令をうけて、シャーフ大尉が来艦した。本艦は同大尉の指示に従って投錨した。その上で私はオホーツク市に行き、われわれが日本沿岸で蒙った災厄と損害を港務部長のミニツキー海軍大佐に報告した。同大佐はイギリス海軍に在勤した当時から、私もゴロウニン氏も同じように親密にしていた人である。大佐は心の底からわれわれの不幸に同情され、この上もなく熱心に尽力され、聡明な忠言と、及ぶかぎりの助力を与えられた。お陰で（日本人のためにゴロウニン氏が捕縛されたと云って私から簡単な報告をただけでは、上官は早合点して、ゴロウニン氏救出について私として及ぶかぎりの努力をしなかったと判断されるかも知れない）と考えて、いよいよ悲嘆に沈んでいた私の気持も幾らか楽になった。

永い冬期をオホーツク市で過すことは勤務上何の益もないと考えたので、私はミニッツキー大佐と相談の上、ペテルブルグへ行って事件の顛末を詳しく海軍大臣に報告し、幽囚中のわが同胞救出のため日本沿岸へ遠征する件につき大臣の許可を仰ぐつもりで、九月中にイルクーツクに向って出発した。

今回の遠征はこれで終わった。その遠征は多大の苦勞と犠牲を求めるものであったが、(本国政府の方針を実施し、最も遠隔な地方に関する新しい情報をもたらして政府を裨益して、帰国の上は同胞に囲まれて愉快的休養を味わいたい)という楽しみがあったればこそ、その苦勞をも犠牲をも毅然として凌いで来たのだが、案に相違してわが艦長と同僚は恐るべき不幸に遭ったのである！

私はペテルブルグとオホーツク間のこの往復旅行を一冬中に済まさねばならなかった。だから私はヤクーツク(同地には九月末に着いた)で冬道を待つため時間を空費しないで、再び騎馬でイルクーツクまで行かざるを得なかった。私はこの行程を五十六日で涉破することが出来た。総距離參千露里を馬に乗り通したのである。正直に告白すると、この陸路の遠征は私にとっては、これまでのあらゆる遠征のうちで最も困難なものであったと云わねばならない。滑らかな海波に乗りつけた海員にとっては、騎乗の上下動は世界中で最もつらいものである！ 先を急ぐものだから、私はおのおの四十五露里もある大きな宿場間を、勇を鼓して一昼夜に二つも涉破したこともあった。しかしそういう時には、私は全身ひとつとして疲労困憊しないところは無い状態で、顎そのものまでが、自分の役をつとめなくなった。のみならずヤクーツクからイルクーツクに到る秋季の道路は、危険至極で騎馬しか行けないのである。その騎馬は主としてレナ河の両岸をなす急峻な山腹の小径を辿るのである。

山頂から流れて来る泉は、到る処で凍結して、レナ河沿岸の住民のナキペニと呼称する、極めて滑っこい、盛り上った氷になっている。一方ヤクーツクの馬は元来が蹄鉄を打ってないので、その氷上を越える時には、きまったように転げるのであった。ある時、私はこの危険なナキペニの上でうっかりと相当な速力で馬を乗り入れたので、馬から落ちた上、鐙から足を離す暇がなかったから、馬もろとも坂を転げ落ち、油断の天罰に脚を一本折ってしまった。これ位のことで、首の骨を折らずに済んだのは神の助だと有難く思っている。今後やむを得ずこの氷の路を騎行する人々には、物思いにふけらないがよいと勤めておく。というのは、あの辺の馬は坂を上る悪癖があるから、そうした

急坂のナキペキの上を越える時には、馬もろともに倒れた場合に、深い物思いに一杯になった頭の安全を保てるとは、保証のかぎりではないからである。

イルクーツクに到着後、シベリヤ総督が不在のため、民政長官ニコライ・イワノヴィッチ・トレースキン氏を訪問して、極めて懇切なもてなしを受けた。

「オホーツクの長官を通して、諸君の遭遇された災厄について、貴官の報告を受けましたので、本官からずっと前にその報告を上司に転送し、ゴロウニン艦長以下同厄の者を救出するため、日本沿岸に遠征隊を派遣する件について許可を仰いで置いたよ」と民政長官は言明された。

これは私にとっては思い設けない吉報であった。(私はその用件があるばかりに、オホーツクからペテルブルグへの多難な旅行に出たのである)。だから民政長官の勧告に従って、上司の許可を待って、イルクーツクに滞在することにした。

その間、民政長官はゴロウニン艦長の災厄に同情して、私と共に将来の遠征計画を作製し、直ちに*シベリヤ総督イワン・ボリソヴィッチ・ペステリ氏に提出、閲読を受けたが、当時の**極めて重大な政治情勢のため、これに対しては皇帝の御裁可が下りず、私には勅令をもってオホーツクに帰還し、上官の許可を受けてスループ艦ディアナ号を率いてやりかけの測量を続行し、併せて日本側に捕縛された同胞の運命を調べるため国後島へ寄港すべしと命ぜられた。

* シベリヤ総督ペステリ——イワン・ボリソヴィッチ(一七六五～一八四三年)、パーヴェル一世時代には郵政局長、アレクサンドル一世時代には元老院議員、のちシベリヤ総督。デカブリストの一指導者パーヴェル・ペステリの父として有名。民政長官トレステンとの関係は、「シベリヤ総督として、ペテルブルグに居住しながら、シベリヤを統治したので、それに乗じてイルクーツク知事トレステンがシベリヤの半分を強奪し、被支配者に対する野蛮な暴力行為で悪名をはせた」(パヴレンコフ版「百科僻辞典」)と云われている。

** 極めて重大な政治情勢——ナポレオン軍のロシヤ遠征(一八一二年夏)直前の緊迫した情勢を指す。

その冬のうちに、読者諸君も(ゴロウニン氏の手記で)御承知の*日本人良左衛門が、民政長官から特に呼び出しを受けて、イルクーツクに連れて来られ、極めて親切なもてなしを受けた。そしてこの男にわが政府の対日友好意図を理解せしめるため、及ぶかぎりの努力が払われた。彼はロシ

ヤ語がかなりよく判るので、その点は悟るところがあったらしく、

「日本にいるロシヤ人はみな存命で、この話は穏やかに纏りますよ」と請合ってくれた。

* 日本人良左衛門——「靖北録」その他に載っている文化九年八月の良左衛門こと五郎次の「申口」には次のような一節がある。

「九月(文化八年)末の頃ヤコーツカ(ヤクーツク)へ到着した。そこの役人方に着き、一日銅錢十文ずつの割で、二ヶ月分六一〇文貰った。ここで去年国後島で召捕られた赤人(ロシヤ人)の事、並びにこのたび連れてこられた漂流人の事を知った。月末になると、イリコウツカ(イルクーツク)大名より、ここの役人へ手紙で……こちらへ送還せよと知らせてきた……ヤコーツカには外の日本人も来ているから、一緒に行けと言われ、出発した。一十八日目にイリコウツカへ着き、ヤコーツカより付添ってきた者の宅に着いた。月代等いたし、善六と申すものと同、役人方へ参ったところ、「お前らをお呼んだのは外でもない。永い間遠方へ流された事ゆえ、気の毒に思ってお呼び寄せたのだ」といわれ、オロシヤ仕立の上着類並びに襦袢六つ、股引六足、外に一日に銅錢百文ずつを呉れた。私は善六方に同居していた。その後この度渡来の甲必丹(カピタン)ヒョトロ・イワノイチイ・リコルドの子細は知らなかったが、キタイチ(支那)より帰ったところだそうで、同人方へ呼ばれて行った。そこで私を日本に返すが、自分も行くと言った。紙の札で錢一〇貫八四六文くれた。この金を旅料にし、カピタンと一所に、ヤコーツカへ三月に着き、またまたコンパンヤ(露米会社)より錢三貫文貰い、そこに七日間いて、五月初頃にヲホツカまで来た。ここで役人ミハイロ・イワノイチ・ミニイツコイと申す者の方へ着いた。当年帰ってきた船の修復をしているので、終わったら与茂吉外六人の者も日本へ連れていくと聞かされた。これらの者と私は同居していたが、六月二四日乗船した。」(「通航一覽」卷三〇九)。

私はこの日本人をつれてオホーツクに帰ったが、こんどは馬に乗らずに、静かな冬櫓で滑らかなレナ河の氷上をヤクーツクまで行った。同地に着いたのは、三月の終りであった。この季節には自然に恵まれた国々なら到るところ、春たけなわであるが、ここはまだ冬の王国であった。しかも大変な厳冬でいつもなら解氷期の到来と共に雲母にとりかえる貧家のガラス代用の氷塊が、まだそのままになっていた。オホーツクに到る道路は大雪が積っていて、騎馬で通過できなかった。私も、連

れの日本人も、雪の溶けるのを待てなかったので、飼主である善良なツングースに牽かせて、トナカイに乗って出発した。人間に仕える動物のうちで最も有益なこのすばらしい動物について、私は特に賛辞を呈しておかねばならない。トナカイの乗心地は、馬よりも遥かに静かである。少しも飛び上らないで、滑らかに走って行く。それに大変におとなしいから、たとえ人が落ちて、まるで釘づけにされたように、その場に立っているのである。トナカイは極めて背が弱く、背の中央部には何一つ荷物を載せることが出来ないで、前肢の肩甲骨の真上に鞍を付けるが、それは鐙なしの不安定な小鞍で、大変に乗り具合が悪いため、われわれは初めのうちは、たびたび落馬の憂目を見たものである。

オホーツクに着いて見ると、本艦の最も必要な部分は修理を終わっていた。しかし多くの点でオホーツクが不便なため、所要の修理をすっかり済ますことは不可能であった。そうした障害があったにも拘わらず、活動的な港務部長ミニツキー氏の助力をうけて、ロシア国内の最もすぐれた港湾でやれるのと同程度に、本艦の航海準備を立派にすませることが出来た。従ってその後幸福な完結を見たこの旅行に対し多大の協力を払われた、この卓越した港務部長に対し、この機会に謝意を表する次第である。

スループ艦ディアナ号の乗組員を増強するため、港務部長はさらにオホーツクの海軍陸戦隊から下士官一名と兵卒十名を乗組員に加え、かつ航海の安全を期するためオホーツク港の運送船一隻(ブリッグ船ゾーチック号)を私の指揮下に入れられた。この船は、私の指揮するディアナ号の士官であったフィラートフ中尉が指揮することになった。その上、私の部下のヤクーシキン中尉も、カムチャッカへ食料品を持って行くオホーツク港の一運送船パーヴェル号の船長となって転出した。

一八一二年七月一八日(わが文化九年六月二二日)出帆の準備をすっかり済ましてから、私はカムチャツカ沿岸で難破した日本船から救出された★六名の日本人を、母国に送還するため、本艦に引取った。

★ この日本人たちのカムチャツカ沿岸難破は特筆に値する。この難破は、わが同胞たちが日本の沿岸で狡猾なやり方で捕縛されたのと同じ年に起ったものであるが、世にも驚くべき点は、神の攝理によるものか、その日本船の乗組員のうち助かったのは、日本側に逮捕された同胞の数と全く同じであった。われわれとしては、彼らを連れて日本沿岸に出発する時には、

ヨーロッパの習慣から云って、(この交換は困難を伴うけれども、結局は成立するに違いない)と想像していた。しかしこの方面で日本の法律とヨーロッパの法律が如何に違っているかは、読者もあとでお判りになるであろう。(訳註、この漂流民は攝州参影村、加納屋十兵衛手船、歎喜丸の水夫与茂吉、清五郎、忠五郎、安五郎、嘉蔵、吉五郎、久蔵の七名で、久蔵だけは足の病気のため文化八年に送還、あとの六名が本文の航海で文化九年に送還された)。

* 七月二二日(わが六月二六日)午後三時、本艦はブリッグ船ゾーチック号を率いて出発した。私は最短路を通過して、つまりピコヴィ水道(国後水道)あるいは少くともデフリーズ海峡(択捉水道)を通過して国後島へ行く考えであった。この国後島に到着するまでの道中は、特記すべき事件も起らなかったが、ただ一度だけ本艦が危難に遭遇したことがあった。

* 七月二二日——オホーツク出帆から国後島に着くまでの航海については、与茂吉の「申口」に次のように出ている。

「六月二六日、この度の船に乗組出帆いたし、オホツカよりクナジリまで、すべて巳(南南東)の針筋にて走った。オホツカより百里程に離れ小島があり、この島より又々巳の針筋にて、ウルプ島沖合を走り、同三〇日暮方、エトロフ島北方出崎六里程も沖合を通過した。これより東へ向い、シコタン島北の方一里程沖合を走って、昨日クナジリ島へ着いた」(「通航一覽」卷三二〇)。

七月二七日の正午頃、雲霧がはれて、本艦の位置を測定できるほどになった。それによると同日正午には聖ヨーナ島は現位置の南方三七哩のところにあつた。この島は*ビリングス艦長がスラワ・ロシイ号に乗って、オホーツクからカムチャッカへ向って航海中に発見したものである。この島の地理的位置はクルウゼンシュテルン艦長が天文観測によって極めて正確に測定している。元来この老練な航海家の測定した地点は、いずれもグリニッチ天文台と同様に、クロノメーターの精密な点検に役立つものと云えるのである。そう云う訳でわれわれは同島の真位置については毛ほどの疑いも抱かず、同様に同日正午現在の本艦の位置も相当精密に測定しておいた。従って本艦は十哩の距離を保って同島を通過せんとし、ブリッグ船ゾーチック号には本艦から半哩の距離を保てと、信号をもって命令しておいた。私は天気さえよければ、聖ヨーナ島を観察したいと思っていた。この島はカムチャッカからオホーツクに到る普通の航路から外れているため、オホーツクの運送船や露

米会社の船舶もめったに目撃していないからであった。

* ビリングス艦長——イギリス生れの航海家。一七七六～八〇年にはクックの第三回航海に参加し、その後ロシヤの官職につき、一七八五年から約八ヶ年サルイチェフ艦長と共に、当時ほとんど未知の地方であったコルイム以東の北氷洋、ベーリング海、アリューシャン諸島などを測量調査し、貴重な質料を得た。

七月二八日の夜半から濃霧中に風が吹き続いた。午前二時、われわれは濃霧を通して真正面の二〇尋と離れない所に、高い岩石を認めた。その時のわれわれの立場は、想像の及ぶかぎりの、世にも危険なものであった。ぶつつかったが最期、船も微塵に砕けそうな岬々たる岩石に、大洋の真中でこんな近距離まで近づいてしまつては、助かることなど覚束なかった。しかし神はわれわれをこの危難から救い給うた。瞬間、われわれは舵を転じ、速度を落した。こうすれば当面の危険がすっかり避けられる訳ではなかったけれども、その岩石に激突したり、浅瀬に乗り上げたりして受ける艦の損傷を少なくすることが出来るのであった。本艦の速度を落した時、われわれは艦首部に軽い衝撃を一つ感じたが、南に走る岩石の隙間を見つけて、そこに艦を乗入れ、前記の大岩石と、霧の中から顔を出している他の岩石の間の小海峡を通り抜けた。この海門を抜けると、また速力を落とし、潮流のままに艦を流して、次の岩石の間の小海峡を通って、安全な水深のところへ出た。それから帆を一杯にあげて、この危険な岩石から離れて行った。ブリッグ船ゾーチック号には霧中信号をもつて、危険の接迫を知らせておいた。同船は風上に向つて附近を航海して、この大難をまぬがれた。

三時過ぎには霧がはれて、今のがれて来たばかりの危険の全貌がよく判り、聖ヨーナ島とそれをかこむ岩石が非常によく見えた。島は周囲約一哩で、島というよりも、むしろ海中から突兀(とっこつ)とつき出た円錐形の大岩石に近く、どちらから見ても断崖で、近づけそうにもなかった。この島のすぐ近くの東寄りに、四つの岩石があるが、さっき潮流に乗って通つて来たのが、そのうちのどの岩の間であったかは、濃霧だったのでよく判らなかつた。この大洋の水中からぬつと突き出た、航海家にとって危険きわまる巨岩を見ると、われわれは宿命の昨夜感じた以上の恐怖を覚えるのであった。突如として降りかかつて来た危難は、急転回によつて一瞬のうちに避けたので、われわれは破滅の恐怖を十分に考える暇もなかつたが、あの闇の底の真正面に聳えていた岩石に本艦が激突していたら、それっきりで破滅はまぬかれなかつたのである。

しかし今にも本艦を乗り上げそうに、岩石とすれすれに避けた時には、本艦は暗礁にふれて、不意に三度びりびりと揺れたのである。正直なところ、この震動は、私の心の底まで揺さぶるものであった。その時、岩に当る波は宙に飛び散って、大変な音を立てて艦上の号令をすっかり押しつぶしてしまった。

(もしも全員が破船のため死んだら、幽囚の苦に呻吟している同僚を救出する手段として、神がやはり破船によって助け給うた日本人たちも死んでしまうであろう)という最後の考えに達すると、私は心の中でぞっとした。

晴天になったので、われわれは聖ヨーナ島のほかに、ブリッグ船ゾーチック号をも余り遠くない所に発見した。こうして一通り観察してしまうと、また例の如く濃霧がかかって、われわれの視界は周囲数尋に限られてしまった。

この危険な事件が済んでからは、逆風の妨害を受けたほかには、特に好奇心を起すほどの事は何も起らなかった。

八月一二日の午後、われわれは初めて陸地を見た。それは得撫島の北部をなすものであった。逆風と濃霧のため、本艦は一五日までは択捉水道を通過できなかった。それと同じ理由で、本艦は更に十三日間、択捉、色古丹、国後などの沿岸に喰い止められていた。従って*八月二八日(わが八月四日)まではこれらの島々のうち最後の国後島の★湾に入れなかったのである。

★ 去年不幸な同僚たちを日本人のために生捕りされた湾で、われわれが背信湾と名づけたものである。

* 八月二八日——「文化元年九月一日小笠原伊勢守から荒尾但馬守に送る書状」には、「当月三日、クナジリ島の内ケラムイ崎後の方に異国船が見える旨、太田彦助より申してきたので、御届書を差出す」とあるが、「通航一覽」の編者は「按ずるに、この届書ならびに注進状等所見なし」で、同月一二日附の太田彦助の御用状までの到着早々の記録がない。しかし文化九年八月良左衛門こと「エトロフ島番人小頭、五郎次」の申口によると、「当三日夕方クナジリ島へ取り着いたが、日も暮れたので停泊し、翌四日四ツ時頃湾内へ乗入れ、菰張りのない所へ碇を入れ」とある。漂流民六名の調書にも大体これと同意味のことが書いてある。

湾内の陣地を見渡し、着弾距離以内を通過して見ると、一四門の砲を二層に備えた新築の砲台

をみとめた。部落の内部にかくれた日本人たちは、本艦が湾内に姿を現わした瞬間から砲撃せず、何の動きも認めることが出来なかった。部落全体が海に面した方にだんだら染めの布を張っているので、その幕を越して見えるものは大きな兵営の屋根ばかりであった。日本側の小舟は全部汀に引き上げてあった。この外観によって、(日本側は去年以上に防備を改善したぞ)と判断する理由を認め、本艦は部落から二哩のところに錨を降した。

上述の通り、ディアナ号で送還して来た日本人のうちに、良左衛門といってロシヤ語の多少判る男が一人いた。この男は六年前に、フヴォストフ大尉のために拉致された者である。私はこの男を通じて、国後島の総大将あてに、日本語で短い手紙を作って置いた。この手紙の趣旨はイルクーツクの民政長官から私あてに送って来た★手紙から採ったものである。

★ 民政長官はその書翰の中に、ディアナ号が日本沿岸に寄港した理由を述べ、ゴロウニン艦長捕縛の際の裏切り行為を記述して、次のように結んでおられた。

「かかる予期しない非友誼的行為にも拘わらず、わが方はわが偉大なる皇帝の勅命を正確に履行する義務があるため、カムチャッカ沿岸にて難破した全日本人を母国に送還するものである。なお、これはわが方において何らの非友誼的意図を過去現在とも有しないことを証明するものである。故にわが方においては、国後島において捕縛されたゴロウニン海軍少佐以下の者は、全く無罪にして何らの害毒をも加えない者として、返還あるものと確信する次第である。但しわが方の予期に反して、日本最高政府の許可ないため、またはその他何らかの理由により、今直ちにわが方の捕虜を返還されない場合には、来年夏、再びわが方の艦船を日本沿岸に派し、わが臣民の引渡を要求するであろう」

この手紙を翻訳する時、頼みの綱にしていた良左衛門は、本件に役立とうと熱心に協力している最中に、露骨に狡猾さを示した。本艦の国後に着く数日前に、私は翻訳をしてくれと頼んだけど、良左衛門はいつもこの手紙は長いから翻訳できませんとブロークンなロシヤ語で云うのであった。

「わしわかるな、お前さん話すな、そしたらわしが短かい手紙を書くよ。お前さん手紙、あんまり利巧なこと、沢山書くな、日本ぺこぺこ嫌いだよ。本筋だけ書くよいな。支那人いつもこんなの書くよ、頭ごちゃごちゃなるよ」

日本の礼儀がそうと判ったら、私としては良左衛門がたった一つの意志だけしか書かなくても、それに同意するより他はなかった。国後に到着した日、私は良左衛門を呼び出して、手紙は出来ているかとたずねた。彼は大型用紙半枚に一杯書きこんだものを渡した。たった一文字でまとまった意味を現わすという彼らの象形言語の性質から判断すると、この手紙には良左衛門として自国政府に通知する必要がある事項、つまりわが方にとっては極めて不利な事項が詳しく記述してあるに違いなかった。そこで私は早速、

「これは当面の用件としては大きすぎるが、きっとお前が勝手にいろんなことを書きこんだんだろう」と云ってやって、「出来るだけでいいから、ロシヤ語で中味を話してくれ」と求めた。

良左衛門は少しも気を悪くしないで、これは一つは当面の用件、一つはカムチャツカにおける日本人の難破事件、そして一つは彼がロシヤにおいて体験した災難について書いた都合三本の手紙であると説明した。そこで私はこう宣言した。

「今送るべきものはわが方の手紙だけで、あとの手紙は次の機会に回してよいのだ。しかしお前として是非とも自分の手紙を送りたいと思うなら、そのコピーを私に渡して貰いたい」

良左衛門は何の弁解もしないで、わが方の短い手紙の部分だけ写本を作って、あとの部分は「たんと難しく写せない」と云って、そのままにした。

「どうして難しいんだ、お前が自分で書いたんじゃないか？」

すると良左衛門は憤慨して、

「うんにや、破ったがええ」と答えたかと思ふと、ペンナイフを取り上げるや、その二本の手紙を書いた所を切りきざみ、それを口に入れて、「ざま見ろ」と云ったような狡猾な身振りよろしく、私の目の前で瞬く間にのみ下してしまった。

* その紙片に何を書いてあったかは、われわれには秘密であった。しかも私はこんな狡猾で、いかにも依恬地な人間に、必要のためとは云え、わが身を托さねばならなかったのだ！ 私としては、この紙片には本当に当面の用件が書いてあるのかどうか確かめねばならなかった。こんどの航海中、私はたびたび日本関係のいろいろな事項について、この良左衛門と話をし、幾らかのロシヤ語の日本訳を書きとめて置いた。そしてその時は別に何の考えもなかったけれども、思い附くままにロシヤ人の名前を日本語でどんな風にかくか、たずねて見た。その中には何時も私の心の底に入っている不

幸なワシリー・ミハイロヴィッチ・ゴロウニンの名も入っていた。だから私はその手紙に、ゴロウニン氏の名を書いてある場所を教えて貰った。そしてあとでその文字の書き方と、良左衛門自身が前に書いて置いたものとを比較して見て、これはゴロウニン氏の事を書いていると、完全に判った。

* その紙片に何が書いてあったか——前掲、五郎次の「申口」には、この辺の事情が次のように出ている。

「カピタンが申すには、お前たちを岡へ揚げ、去年捕われた者を連帰れば喜ばしい、と言っていた。夕方漂流人と与茂吉へ申しつけたのは、ここへ碇を入れ水を取ることに、並びに去年捕われた者が息災であるかどうかを尋ねてくるように、とのことだった。与茂吉が帰船できないときは、否の印を建てるよう申付けていた。与茂吉もそれは請合いかねるといって、カピタンより横文字一枚、右の添書をして呉れるよう頼んだ。その書面に、カピタンの話を聞いて、次の通りつけたした。

これはカピタンゴロビン並に六人の者どもの生死所在の程、および右七人の者御帰し下さるべき旨を記した横文字の手紙であります。外にヲロシヤ言葉通じた御方がありましたら、御読みくださるように。

これを、甲必丹の書付と一所に封をした。もう一つの横文字は(案ずるに、このあたりは誤脱があるかもしれないが。)船の甲必丹より、去年捕われたカピタンへ遣わしたものの。この外に私よりの一通は、彼の国で見聞したことをあらまし書付けて封印した。以上を御詰合様へ申上げるよう、与茂吉へ渡し、伝馬船に載せてセンベコタンへおくれた。直ちに伝馬は本船へ帰ってきた。」「(「通航一覧」卷三〇九)。

私はこの手紙を、こんど送還して来たうちの一人の日本人(与茂吉)に托して、「国後島の隊長に直接これを渡してくれ」と云った。われわれは碇泊地点の正面の海岸にこの日本人を揚陸した。間もなく数名のアイヌ人が出て来て、その日本人を迎えた。

このアイヌ人たちは高く茂った草の陰にかくれて、こちらの一举一動を見張っていたものと思わねばならない。

こちらからやった日本人はそのアイヌたちと一緒に部落の方へ歩いて行ったが、それが城門に着いた途端に、砲台からまともに湾内に向って実弾を発砲した。これは今度の到着以来最初の砲撃

であった。私は良左衛門にたずねた。

「ロシヤ船から降りた者が、たった一人で堂々と部落に近づいて行くのを砲撃するとは一体どういう訳だね」

「日本な、いつでも、こうだよ。人殺すいけない、大砲撃つよろし。これ掟あるな」と彼は答えた。

日本側のこの不可解な行動は、(彼らと交渉を開く可能性がある)という、私の心の中に兆しかけていた慰めの気持をすっかり押しつぶしてしまった。最初湾内を視察するため本艦がずっと部落に近づいた時には、日本側ではわが方に向って射撃しなかったが、こんどのわが軍使に加えられた歓迎ぶりは、再び私を絶望に陥れた。というのは本艦上では何の物騒ぎも起らず、また一人の日本人を陸岸に送って来たカッターはすでに本艦に帰着していたから、その発砲の真意が推察出来なかったのである。城門の傍では、一群の人間がこちらの日本人を取囲んでいたが、間もなくその姿は見えなくなった。三日間というもの、われわれは空しく彼を待ちわびていた。

その間、朝から晩まで、ずっと陸岸を望遠鏡で注視していたものだから、こちらの日本人を上陸させた地点から、部落に到るまでの所は、小さな杭に到るまで地物という地物は全部見なれてしまった。それにも拘わらず、その地物が動いているように見えることが、たびたびあった。そんな時には私は幻影に欺かれて、大喜びで叫び立てたものである。

「こっちの日本人が来るぞ！」

時にはわれわれ全員がいつまでも感違いしていた事もあった。それは日出時の濃密な大気を通じ、光線が屈曲するため、万物が極度に大きく見える時のことであった。翼をひろげて汀を飛び廻っている鳥までが、例のだぶだぶの長衣を着た日本人かと思われるのであった。当の良左衛門も、何時間も続けざまに望遠鏡を覗いていたが、誰ひとり部落から出て来ないので、極度に不安を感じていた。その部落はわれわれから見ると、蓋をした寝棺に変わったかと思われるのであった。

* 夜になると本艦はかならず戦闘配置を保っていた。静まり返った空気を破るものは、わが番兵たちの呼びかわす信号だけであった。信号は湾内一杯に伝わって行って、隠れた敵どもに、「こちらは眠っていないぞ」と警告するのであった。

* 夜になると——この警戒の様子は前掲五郎次らの「申口」に次のように出ている。

「程なく日も暮れると、大筒に残らず玉を込め、口薬を差し、砲手を筒前に置いた。小筒も同

断、火縄に火付を置き、櫓の上には二〇人ばかり番人を置き、一同用心いたし、一人も寝る者なく」(「通航一覧」卷三〇九)。

* 水が欠乏したので私は、武装兵を乗せたボートを小川へ送って、樽に水を汲んで来いと命じ、同時にも一人の日本人(清五郎)を上陸させ、露船から小舟を陸岸に送った理由を国後島の隊長に通告せしめた。私としては、これについて良左衛門に短い手紙を書いて貰いたかったけれども、彼は、

「最初の手紙に対して何の返事もないから、日本の掟から云って、重ねて手紙を書くことは憚ります」と云って拒絶し、「ロシヤ語で短い手紙を書いておやりになれば、こちらから送る日本人がそれを説明できるではありませんか」と勧告したので、私もその通りにした。

* 水が欠乏したので——これは露暦九月一日(わが八月七日)のことで、太田彦助より高橋参平に送る文化九年八月一二日附の御用状に次の通りある。

「当七日四ツ時頃、異国船兩艘より伝馬船二艘ずつ、センベコタンの方へ水取りと見え、桶様のものを引いて乗出してきた。ややあって、海岸通り上手の方へ日本人が一人やってきたので、会所前の土手外で、支配人利左衛門に尋ねさせた。彼は、水取船に乗組み上陸したといい、上書もない、赤い膏葉のような物で封印した一封を差出した。これを当所へ差上げるよう、ロシア人より申付かり持参した、といった。この者も播州加納屋十兵衛手船水主の由であった。利左衛門はこれを聞いて、竹内五郎助、山口茂右衛門の二人の同心を召連れ、土手外へ罷出、上書もない封書は、当方にも受取り難く、この後何度持持ってきて、取上げないから、重ねて来内容に申し聞かせた。水番場へ行って帰るよう申渡した。外の事は相互に聞かず、早々に帰らせた。水取りの伝馬船へ乗組み本船へ立帰った様子は、追って遠見の夷人が見たことであろう。これにつき大砲打ちの件を南部家へも相談したが、トマリより本船までは町数遠く、とても玉は届かないという。そこで、フシココタンの内ヤムワカ、シュンビと申す所へ、兼ねて幕張もして置いたので、そこへ当方の二〇〇百目の長筒一挺、南部家陳屋内に備えてあった一〇〇目の長筒一挺を持運ばせ、夕方七ツ時頃より本船を目当てに打始め、二〇〇目の方五発、一〇〇目の方三発打った。二挺とも玉間遠く届かなかったけれども、この打払いの前、大船の方より伝馬船二艘に水桶に思われるものを数々

引いて、センベコタンの方へ向け、本船よりおよそ八、九町も乗出してきた。そこで大砲を打ったので、伝馬船は本船の方へ漕ぎ戻った。……彼よりは小砲さえ打出さず、程なく晩景になったので、南部家共に右出張所を引払い、トマタの方へ帰った。」(「通航一覽」卷三〇七)。

数時間たつと日本人が帰って来て、隊長にお目にかかって、お手紙を渡しましたが、受取って頂けませんでしたと云った。こちらの日本人が、露船から乗組員が陸岸へ行ったのは水を汲むためです、と伝えると、隊長は、

「苦しくない。水は汲ませて取らすが、その方は立ち戻るがよかろう！」と答えたきりで、あとは一言も云わずに、引っこんでしまった。こちらの日本人はしばらくアイヌたちに囲まれて陸岸にいたけれども、アイヌ語が判らないので、何一つ聞き出すことは出来なかった。日本人たちは遠く離れたところにいて、あえて近づく者もなかったそうである。とうとうアイヌたちが手籠めにせんばかりにして、彼を門外に突き出したのである。

この日本人は人が好いから、実は陸岸に残りたかったので、せめて一晩でもこの町に居させて下さいと涙ながらに隊長に嘆願したけれども、大変に怒って弾ねつけられましたと、私に告白した。われわれはこの不幸な日本人に対する日本側のこの行為からして、(最初にやった日本人もこれ以上の歓迎は受けなかったに違いないが、日本人特有の疑い深さからして、わが方の捕虜について何の情報も持たずに帰艦することを恐れ、山中にかくれたか、または島内の別の村に行ったに違いない)と断定した。

私は一日のうちに水の汲入れを終えたいと思ったので、午後四時、残りの空樽を陸岸へ送れと命じた。こちらの一挙一動を見張っていた日本側では、ボートが陸岸に近づいた頃を見計らって、砲台から空砲を打ち出した。私は日本側に非友好的と思われる行動は一切避けるつもりであったから、直ちにボートは全部本艦へ帰れという信号を出させた。日本側でもそれに気付いて砲撃を中止した。

*ここ七日間の背信湾(泊湾)滞在中、日本側はそのあらゆる行動を通じてわが方に絶大な不信を表明し、かつ国後島の隊長は、彼一個の意志によるものか、または上官の指令を受けたものかは知らないが、全然わが方との交渉を拒否していることが、はっきりとわが方にも判った。従ってわ

れわれとしては、こちらの同僚の運命を知る方法が、全く見当もつかなかった。

- * ここ七日間——泊湾到着の七日目は露暦九月三日(わが八月九日)で、前掲太田彦助の御用状に次の通りある。

「同九日朝四ツ時頃、北の方で運送船が、帆をあげてケラムイの方へ向かった。そして伝馬船を1艘下し、テレケウン番屋へ上陸した模様なので、親船を目当てに、三貫五〇〇匁の砲弾を一発撃った。距離が遠くて届かなかったが、程なく親船、伝馬船ともに戻って行き、元のように大船の横につながった。異国人どもはテレウシケへ上陸し、番屋板蔵などを覗いて行ったようだが、板一枚も紛失してはいなかった。もっとも番屋の品物は残らずトマリの方にかねてから運ばせてあったのだが、板蔵にあった運び残りの鱈メ粕少々も、まったく持って行かなかった。」(「通航一覧」巻三〇七)。

昨年、この不幸な囚人たちの所持品を漁村に置いて来たので、われわれは日本側がその品物を取ったかどうか、調べたいと思った。そこでブリッグ船ゾーチック号の船長フィラートフ中尉に対し、帆をあげ、武装兵を率い、その部落に行き、残して来た品物を見て来いと命じた。ブリッグ船が陸岸に近づくと、砲台から発砲したが、距離が遠くて、少しも心配はなかった。数時間すると、使命を果たして来たフィラートフ中尉は、あの家屋には不幸な囚人たちの所持品は何一つ見かけませんでした、と報告した。われわれはこれを吉兆と思い、同胞が皆生きていると考えて、全員元気づいたのである。

- * * * その翌日(露暦九月四日わが八月十日)私はまた日本人(忠五郎)を上陸させ、ゾーチック号を漁村へやった用件を日本の隊長に通ぜしめた。彼は日本語で書いた短い手紙を携行した。良左衛門にこの手紙を書くよう納得させるには、大変な骨が折れた。この手紙には、「交渉のため国後島の隊長も舟に乗って、こちらと出会うようにして貰いたい」という提案が書いてあった。私はこの手紙に、こちらのボートが漁村に行ったのはどういう意図であるかも、詳しく書かせたかったけれども、良左衛門は手に負えない奴で、とうとう我を通してしまった。

- * その翌日——前掲、五郎次の「申口」によると、

「十日になると、又々陸へ書付を持っていくようにいわれた。断ったが強いて命ずるので、やむを得ず次の通り書いた。

「この船のカピタンが御上様へ御挨拶したいから、お目に掛りたいとのことであります。」

これを忠五郎へ渡し、センベコタンへ上陸させ、同人から御会所へ書付を差上げたところ、右の書面の通り面会するから、当所へおいでになるよう、カピタンに伝えよ、と仰せ含められた。センベコタンへ戻り、迎船を呼んだが、一向返事がなく、程なく日も暮れたので、草の中へ野宿した。翌十一日朝、水取船がやってきたので、本船へ立帰り、言われた通りに甲必丹へ申したところ、陸へ上って相談したいというのではなく、互いに船にて相談したい、陸へ上って、去年のように又々捕われてはならないと、甲必丹は言った」（「通航一覽」卷三〇九）とある。

一方の国後会所では、大田の報告によると、右の日本語の書面を読んで、

「右に付相談の結果、異国船二艘とも、遠沖に停船しているので、とても玉間も遠く打払うべき手段もない。又今年是用船を伴って来ているので兵糧の貯えもあり、その上時節後れに渡来したからには、オホツカへは帰らず、カムサツカの内ガワン港へ帰帆の積りであろうと、漂流人と茂吉も申し出ていたから、いつまで滞船するかも計り難い。長くなれば、当方一同の疲れと成り、萬一いわれなく打破られるようなことがあれば口惜しい。この頃毎日センベコタンへ伝馬船を寄せ、又はケラムイへ上陸している。玉間遠く隔てているとは申しながら、見るだけでは心外である。既にセンベコタンへ出張いたし、伝馬船を打払う相談もした事であるから、今日の書面はもっけの幸い、カピタンと面談すると偽り、おびき寄せて、親船なり伝馬船なり、矢の届く距離になったら、打払い決戦しようと、同心らを呼寄せ、その手筈まで詳細に相談した。そして、当方は一致して交渉に応ずると決めたので、上陸してくるよう申し含め、夕七ツ時過ぎ、忠五郎をセンベコタンへ帰した。南部家の者へ、この手段で異国船おびき寄せる積りだから、矢が届く距離になったら打払う……と申合わせ、異国人の返事を待った。忠五郎をセンベコタンへ帰したけれども、日も暮れ、伝馬船の迎えも来ず、その夜は同所海岸で寝たようだ。」（「通航一覽」卷三〇七）。

＊ ＊ その翌日——前掲、太田彦助の御用状にいう。「翌十一日……夕七ツ時頃、去る卯年（文化四年、一八〇七年フヴォストフの襲撃の時）エトロフで捕われた番人五郎次と、昨日の使忠五郎が、センベコタンより当会所の方へやってきた。土手の外で糺したところ、忠五郎に

与えられた役割は、特段のことではなく、去年当所で捕われた異国人どもの様子を聞きに来たのだった。カピタンが五郎次へ命じたのは、面会は陸上ではなく船上で行いたいとの申し入れであった。この件は評議中日も暮れ、二人をセンベコタンへ帰しても、伝馬船も居ないし、土手外へ留め置くと、備への様子を船から見透かされては相ならずと番人は言う。二人が小用に行く時は、付添うよう厳しく申渡し、番人を附置いて、評議を続けた。昨日私は牢内を見廻り、漂流人と茂吉から何となく彼の船のようすを聞き出したところ、カピタンはとにかく去年捕われた者の安否を聞きたく、松前、箱館、長崎に居るかとも、安否がわかる処へ行きたいと考えている様子である。かねて命を受けていることでもあり、このように日本人を度々寄越して、万一異船に知れて、松前へ行かれては、騒動が広がって宜しくない。どうしても当方かぎりでは喰い留めなければならない。種々評議の上、翌一二日朝、土手外において五郎次、忠五郎へ申聞せたのは……ゴロウニン以下を国後島で殺害したと、申し含めた。二人をセンベコタンへ返したが、迎いの伝馬船には一人だけ乗り漕ぎ帰ったと、遠見の者が知らせた。一人は陸に残ったと見える。遠見の夷人を遣わしたところ、しばらくして、夷人は逃げた忠五郎を同道して帰ってきた。忠五郎を糺すと、途中で深草の中へ隠れ、木立があつたら縊死しようと、草を分け山手の方へ逃げたところ、夷人に会った。死をきめた上は、会所へ連れて行かれて殺されても、日本の土になりたく、もしまた慈悲で助かれば仕合せに思うと、申立てた。一通り糺して入牢させて置いた」(「通航一覽」卷三〇七)。

派遣した日本人は翌朝早く帰って来た。われわれが良左衛門を通じてその日本人から聞いたことは、隊長が手紙を受取ったが、書面の返事は何もくれないで、ただ

「苦しくない、ロシヤの艦長が交渉のため当会所へ参ったがよかろう」と伝えよと命じたことだけであつた。

こんな返答では拒絶も同様であるから、私としてその招待を受けるのは無謀な話であつた。

次にわが方の者が漁村へ上陸した理由を通ずると、隊長はこれに対して

「いか様な品物の事やら、あの時は早速返したではないか」と答えた。この二通りの意味を持った、どっちつかずの返事を聞くと、こちらの捕虜たちがまだ生存しているという甘い考えも崩れてしまうのであつた。

こちらからやっった日本人は、この前の男と同じ待遇をうけ、部落に一泊することを許さなかったの
で、日本人は本艦の正面の草の中で一夜をすごしたそうである。

ロシア語を知らないこちらの日本人たちを通じて、こんな手応えのない交渉を続けるのは全く無益
の沙汰と思われた。いろいろの場合にこちらから送った日本語の手紙に対して、長官からは何一つ
書面の返答は来なかったのである。従ってわれわれとしては、苦しい五里霧中の感じを抱いたまま、
再びこの陸岸を去るより他には道はないようであった。一方ロシア語を知っている日本人の良左衛
門は、私としてよくよくの必要がない限り、国後島長官との交渉のため上陸させる決心がつかなか
った。それは彼が陸上に留められたり、または当人が帰艦を好まなかった場合に、われわれは唯一の
通訳を失う心配があったからである。だから私は次の方法を探ることにした。

私としては、この海峡を通過する一日本船に不意に本艦を乗りつけ、武器を使用せずにその中
の主な日本人を捕えても、何らわが方の対日平和意向にもとらないのみか、可能にして正常な行
動だと思う。そしてその日本人からロシア人捕虜の身の上について正確な情報を得れば、私自身も、
士官たちも、全乗組員もこの重苦しい徒労の状態を脱し、何ら成功の見込みもない国後島への再
度の来航の必要がなくなるのである。というのは、所期の結末を得んとするあらゆる方策が無益なこ
とを経験が示したからである。ただ間の悪いことには、三日間というもの海峡には一隻の船も姿を見
せなかったの、秋季になって日本側の航海が中止されたのだらうと、われわれは考えた。

こうなれば残るは最後の良左衛門にかける望み、つまり出来るかぎりの情報を得るため彼を上陸
させることだけであった。だから私は彼の胸中を確めるために、こう予告した。

「本艦は明日航海に出るから、自宅に書き残したいことがあったら、手紙を書いて置くがよい」
すると良左衛門は顔色を変え、取って附けたような態度で、よく知らせて下さいましたと云って、
「ようがす！ もう帰宅を待つなどだけ書いておきます」と云って、それから熱をこめて続けた、「私
はたとえ殺されても、もう航海には出ませんよ。こうなればロシア人の間で死ぬばかりです」

こんな考えを持った人間では、決してわれわれの役には立ちほしない。しかし良左衛門のこの激
昂ぶりも、当然だと云わねばならぬ。彼が六年間もロシアで苦勞したことを知っているだけに、私と
しては、(この男は帰国の望みを失ったら、失望のあまり、自殺しはしまいか)とまで心配した。だか
らわれわれを襲った災厄の事情を詳しく知っているこの男から、あるがままに本艦の来航を国後島

の隊長に伝えさせ、もって隊長をして心機一転わが方との交渉に入らしめるために、私は*良左衛門を上陸させることに決心した。私からその話をすると、良左衛門は、たとえどんな情報であっても、隊長さえ引きとめなければ、必ず帰艦しますと誓った。それは有りがちなことだから、私は次のように用心した。即ち一度部落に行って来た日本人(忠五郎)を良左衛門につけてやり、かつ良左衛門に次のような三枚のカードを渡した。その一枚のカードには「ゴロウニン艦長以下国後島にいる」と書き、二枚目には「ゴロウニン艦長以下、松前、長崎、江戸に護送された」と書き、三枚目のカードには「ゴロウニン艦長以下、殺害された」と書いておいた。私はこのカードを良左衛門に渡す時にこう頼んだ。

「もし隊長がお前の帰艦を許さない時にはこのうち先方の話と一致するカードに、町の名やその他の注意を書きこんで、連れの日本人に渡してくれ」

九月四日(わが八月一日)この二人を陸島に揚げた。その翌日、二人とも部落から帰って来るのを見て、全員大喜びし、直ちに迎えのボートを出した。(われわれはこんどこそ良左衛門が満足な返答を持って来るぞ)と希望をつないでいた。ところが二人を見失わないように、望遠鏡をのぞいていると、一人の日本人が横へそれて行って、深い草の中に姿を消した。そしてこちらからやったボートで帰ったのは良左衛門だけであった。

「も一人の日本人はどこへ行った」と私から聞くと、良左衛門は、

「知りません」と答えた。

しかしこちらは皆じりじりして良左衛門のもたらしたニュースを聞きたがっていた。しかし彼は、艦室で私に知らせたいと云った。そしてルダコフ中尉も列席の上、艦室で私に向って、やっとの思いで隊長の前に通された話から始めた。隊長は、良左衛門に一口もきかせないで、たずねた。

「艦長は何故、会談のため上陸しないのか」

「存じません。艦長はゴロウニン艦長以下の捕虜はどこにいるか、あなた様にたずねてくれと云って、今度私をよこしたのでございます」

われわれは良左衛門のこの質問に対して隊長の与えた返答を、恐怖と希望を交えた気持ちで待っていた。ところが良左衛門は口ごもって、

「本当のことを云っても、酷い目には会わせませんか」とたずねた。

「そんなことはしない」と私から云って聞かせると、次のような言葉で恐るべき情報を伝えた。

「ゴロウニン艦長以下全員殺されました！」

この知らせはわれわれ全乗組員を深甚な悲嘆につき落とし、当然の感情として、わが友の血を流した陸島を誰しも平気で見られなくなった。こういう場合に如何なる行動に出るべきかについて、私は上官から何の指示も受けていなかったが、(本国政府は日本側のかかる悪逆行為を看過しはしない)と確信したので、この悪人どもに対しこちらの力の及ぶかぎり自分の正常と考える報復を加えても構わないと思った。ただ私としては良左衛門の一言ばかりでなく、もっと確かな証拠を持っている必要があった。そのため私は*再び良左衛門を陸岸に送り、この件に関し日本の隊長から書面の確認を求めさせた。なお良左衛門と残っていた四名の漂流日本人には、

「こちらで非友誼的行動に出る決意をつけたら、皆をすっかり釈放してやる」と約束してやった。同時に両船には日本部落襲撃の準備を整えよと命じておいた。

* 再び良左衛門を陸岸に――前掲五郎次の「申口」にはこの辺の事情が次のように出ている。

「私一人が本船へ帰り、仰せ含められたように、カピタンへ伝えたところ、大いに驚き船中の一同呼出し、事の次第を伝えた。とても生きては居られないと、カピタンが言い、一同帽子を脱ぎ、宣誓した。長さ二尺ばかり、横幅二尺ばかりの大砲の車台を二つばかり、本拵えに取懸った。いよいよ打合いが始まるかと推察していたところ、昼頃になって、去年捕われた者は殺されたという書付を貰いたい。私にもう一度岡へ行くよう、カピタンが命じた。御役人のいわれた事に偽りは無い、書付を願うなどは思いも寄らない。もう岡へは参りませんと申ししたところ、岡へ行くよう強いて言いますので、それなら、漂流人はかねてお話されていたように、右四人のものを岡へ上げ、彼らを送った機会に、書付の件を申上げてみます、と答えた。直ちに漂流人清五郎、安五郎、嘉蔵、吉五郎を呼出し、岡へ遣ると申聞かせ、直ちに私と共に伝馬船でセンベコタンへ上陸した。御当所へ来て、書付の件を申上げたところ、漂流人四人は御構の内へ入れられ、私は土手外へ前夜のように番人衆を付け置かれた。翌一三日御構の内へ入れられ、一通り質問されたうえ、入牢を仰付けられた」(「通航一覽」卷三〇九)。

良左衛門はその日のうちに帰りたいと云っていたが、こちらからは彼の姿は見えなかった。その次の日も彼は部落から姿を見せなかった。もうこれ以上彼の帰艦を待っても見込はなかった。良左衛門が帰艦しないため、こちらの捕虜たちが死んだという話は怪しくなって、われわれは大いに安心したが、私はその真相を確めるため、陸岸からなり、船に乗っていたり、本物の日本人が来るのを捕えて、こちらの捕虜の安否について確たる真相をつかむ好機が来るまでは、この湾を離れないと固く決心した。

九月六日(わが八月一三日)われわれは一艘の日本の小舟が近くを通るのを認めた。私は二隻のボートでルッダコフ中尉を送り、進んでこの最初の敵対行動を買って出たスレッドニイ君とサヴェリエフ君の両士官をその指揮下に配した。私の派遣した部隊は、陸岸の水際でその小舟を捕獲し、間もなく小舟を引いて帰艦した。この小舟に乗っていた日本人たちは逃げ去り、そのうちの二人の日本人と一人のアイヌだけをサヴェリエフ君が岸边に茂った草の中で逮捕しただけであった。しかしわれわれは、この連中からは何一つこちらの捕虜の事を聞き出せなかった。私から話しかけると、彼らはすぐに土下座して、どんな質問を出しても、「へ、へ！」とかすれ声で返事するばかりであった。そして幾ら可愛がっても、彼らを言(もの)を云う動物にすることは出来なかった。(ああ！この奇怪な国民を相手にして、どうしたら話をつける事が出来るだろう！)と私は考えた。

* その翌朝(九月七日、わが八月一四日)一艘の大型日本船が、本艦の位置と反対側の海岸にそって、外海からまともに湾内に入って来るのを認めた。私はこの日本船に向って、フィラートフ中尉の指揮する武装兵を乗せたボートを派した。ただし威嚇するだけで、武器を用いずに停船せしめ、その船長を本艦に連行せよと嚴重に申付けておいた。

* その翌朝——「靖北録」、「蝦夷雑事」から「通航一覽」に収録した「エトロフ島請負人高田屋嘉兵衛および同人の水主金蔵、平蔵」の帰国当時の「口書」にはこの日の出来事が最もまとまった形で記述してあるので、その「口書」の前半を引用する。

「私共は、持船の觀世丸へ荷物積入れ、稼方その外とも都合四六人乗組み、去年(文化九年)八月二日シヤナを出帆し、同一二日スイシヤウ島へ般繋ぎしようとしていたところ、エトロフ御詰合様より、箱館への御用状一封を渡され、これは急御用状とのことであつたので、下り風では箱館への出帆は成り難く、クナジリ御会所へ差上げ、ここから箱館へ御差立に

なれば、早々に箱館へ届きましょう、とのべた。話はまとまって、翌一三日昼頃同所出帆、翌一四日朝、当ケラムイ岬を過ぎる頃、およそ一五、六間ほど隔てて、凶合船に異国人二〇人ばかりも乗組み、私共の船へ向け漕ぎ来る様子であった。大砲の音も聞えていたので、オロシヤ船が来ているなど驚き見ると、異国船二艘がおり、沖の方へ逃げようと船を廻したが、なお凶合船の方へ近付いてしまった。異国人どもは鉄砲を打懸け、ほど無く私共の船へ押上り、おのおの脇差様の抜身を振廻わし、また異国船の伝馬船が一艘、およそ二〇人ばかり乗組み、同様に押し上ってきた。このとき私共の乗組の内、海へ飛込み、又はここかしこへ隠れる者もあったが、支える手段はなかった。そのうち嘉兵衛を初め、隠れた者をも尋ね出し、縛り上げ、船中の刃物類残らず取上げて、船人ともオロシヤ本船の方へ引き行き、観世丸は二艘の間へ繋ぎ、重立ったオロシヤ人五人その外が乗移った。嘉兵衛を始め一同の縄を解き、嘉兵衛へ何か話しかけてきたが、分らなかった。そのうち指を七つばかり折り、クナジリ、松前と言いながら、死んだと言う。これは一昨年クナジリで捕われた者共の事ではないかと察し、嘉兵衛より松前に生きておる、と申したが、分らない様子であった。そより稼方その他の人数を調べたところ、一〇人不足した。これは海へ飛込み果てた者と察した。観世丸から橋船皆具等まで取上げ、異国人一同は嘉兵衛一人を本船へ連行き、外の者は一同観世丸へ残した。嘉兵衛は本船の船長と同居し、種々の方法で問答しても一向に相分らなかった。とかく捕われたオロシヤ人の事のみ尋ねている様子ではあったが、しかとは知り難かった。翌一五日オロシヤ人五人と嘉兵衛が観世丸へやってきて、乗組のうち一〇人は陸へ帰すといった。嘉兵衛はもう少し人数を増やすよう頼んだが、聞き入れられなかった。一〇人のうち角右衛門妻つねに、本船を見せてから陸へ返すよう、手真似で頼んだ。いったんは断ったが是非というので、長松が附添い、嘉兵衛、オロシヤ人共に彼の船へ渡った。船長部屋で彼らの所持の品々を見せた上、彼の国の細工物都合四品、外に花めんきん様の新らしい足袋一足は長松に贈った。強いて断ったが、たつてと申し聞き入れず、結局言語が通じないので致し方なく受け取った。これらの品は上陸の上、御詰合様へ差上げ、ことの委細を申上げるよう、長松へ申し含めた。去年同人より申上げたことと存じます。翌一六日観世丸は乗組人ともに返すことになり、その内四人、嘉兵

衛とも都合五人、オロシヤ船へ乗らせ連行すると船長は命じた。嘉兵衛一人の連行とするよう頼んだが承知しなかった。船頭吉蔵、水主金蔵、早蔵、文次郎、外にシベツ夷人一人が乗組んだ。前日サルカマップで捕らえた稼方二人は陸へ上るよう、観世丸へ乗せられた。嘉兵衛外四人の着替、夜具、その他の品々をフロシヤ船へ積入れ、五郎次並びに漂流人の品、都合五梱は陸へ運び、五郎次へ返すよう観世丸へ載せた。フロシヤ舟二艘は同日暮れ六ッ時頃沖へ出ていった。」「(「通航一覧」巻三一一)。

それから数時間たつと、こちらのボートが大した抵抗もうけずに、その日本船に横づけになり、本船の碇泊地点に向って、日本船を曳航するのを目撃した。フィラートフ中尉は帰艦して、次のように報告した。ボートを率いて日本船に近づくと、武装していると覚しき人間が同船上に沢山いるのに気づいたし、一方日本船の方では同君から身ぶりを示したにも拘わらず帆を下さなかったので、やむなく空に向けて小銃を数発発射した。すると、日本船では直ちに帆を下した。そして陸岸が極めて近かったので、数名の日本人は海中に飛びこんで、陸岸に泳ぎ寄った。こちらのボートの近くにいたものは、水兵に引き上げて貰ったが、他の連中は陸岸に泳ぎついたり、溺死したりした。船に乗っていた日本人の総数は六〇人であった。

間もなく日本船の船長を本艦に連れて来た。その立派な絹服と大刀その他の点から見て、これは相当の人物であることが判った。私は、直ちに船長を自室に呼びよせた。彼は日本の習慣で、低く頭を下げて挨拶し、私の招きで物静かに、機嫌よく椅子に腰をおろした。私は良左衛門から伝授をうけた日本の言葉を使って、この男を訊問し、高田屋嘉兵衛と称する男で、日本では船頭船持、つまり船長兼船主という称号を持っていることが判った。彼の言葉によると、その持船は十艘もあるとのことであった。彼は自分の船を率いて択捉島から松前島の函館湾に向っていたもので、積荷は干魚であったが、逆風のため余儀なく国後島に寄港したのである。

私は本艦の素性と国後島来航の目的を一気にのみこんで貰うために、良左衛門の手で国後島の隊長あてに書かせた日本文の手紙の控えを嘉兵衛に読ませた。彼はその手紙を一読すると、不意にこう云った。

「カピタン、ムール、それから五人のロシヤ人は松前の町にいますよ」

そして一同が何月ごろ国後島から護送され、どういう町々を通過したかと語り、どこには何日間滞

在したと勘定し、ムール君の身長やその他の特徴まで挙げるのであった。ただ一つ嘉兵衛がゴロウニン氏について一言も触れないことが、われわれをして満腔の信頼感をもって、湧きあがる悦びに身をひたさせないだけであった。

われわれの手に捕えられたこの日本船長の立場そのものが、こちらの捕虜が生存していると言明させたとしても、それは至極当然のことである。とはいえ、この船長はどうしたら一瞬のうちに、そんな細々したことまで思いつけたのであろう。反面また良左衛門の行動も解し難い。何の必要があって良左衛門は、われわれにとってこのような悲しい嘘言を吐いたのであろう。あの男の心の底には、日本沿岸でフヴォストフの加えた暴行に対し、ロシヤ人への恨みの焰がまだ消えていないのだろうか？ こちらの捕虜が活着していると伝えたら、自分が本艦に留められるに違いないという理由だけで、ただそれだけの事でそれを伝えなかったのだとすれば、彼は第一日にその宿命のカードを同行の日本人に渡し、自分は陸岸に残っておれば、そうした留置の危険を脱することが出来たではないか。しかしひょっとしたら兇悪な国後島の長官が良左衛門に対して本当に、わが方の捕虜は全部殺害されたという返事をしたのかも知れない。そうだとすれば良左衛門の帰って来ない理由は、わが同胞殺害の報に殺気立った乗組員をあの男が怖れたために過ぎないと云わねばなるまい。

かように色々と考えて見ると、何一つ確かな結果は出なかったけれども、わが方の捕虜は全員存在していると判断する方が正しかった。だから私として情況がこんなに好転したからには、自分の気持に反する処置、つまりこの部落に報復を加えることなど、もう考えも出来なかった。しかし乗組員一同は敬愛する艦長をはじめ、士官や戦友たちを殺されたという第一報で激昂していたので、平然として居られないのであった。一部の乗組員は当直士官に向って、こんどの日本船長は、去年日本側との初会見を行った択捉島の役人に違いないと言明した。この初会見にはムール君とノヴィツキー君が行ったが、そのノヴィツキー君は、あの隊長は自分が択捉島で見た役人と大変によく似ていて、その日本の役人がムール君の名を書きとめたのを自分もよく憶えていると証言した。

「だからあ奴がムール少尉を知っているのは当たり前ですよ。ごらんなさい、あ奴はゴロウニン艦長のことは一口もいわないで、ムール少尉のことばかり飽きもしないで話しているではありませんか」と私の命令で全員後甲板に集合した乗組員が云った、「こちらの捕虜は殺されたに違いありません。だから艦長さえあの悪人どもに復讐する気になられるなら、われわれは全員一致して囚われた同胞

のために自分の血を流す覚悟でおります」

私は心の中では不幸な艦長に対する一同のこの尊敬を嬉しく思ったが、こう云って聞かせた。

「艦長以下のこちらの捕虜は殺されたと考えるより、今では生きていると考えるべき確かな理由が出来たのだ。のみならず上司においてわが方の捕虜を殺されたと確信されたら、必ずや各自実際に本分を尽すべき機会をわれわれ一同に与えられるに違いないのだ」

その瞬間から私は敵対行為中止を決心し、神の摂理によって授けられた★日本の隊長高田屋嘉兵衛を連れて冬営のためカムチャッカに向い、同人からわが方の捕虜たちの本当の身の上と日本政府の意向を聞き出すこととした。(これはこれまでロシヤに來た日本人たちとは違って、もっと身分の高い人間だから、きっと日本の内情にもよく通じているに違いない)と考えたので、私は高田屋嘉兵衛に向って、われわれと共にロシヤへ行く用意をせよと言ひ渡し、こうした行動に出ざるを得なかった理由を説明してやった。

★ あとで判ったが、嘉兵衛は人に敬われた豪商であった。しかし捕虜となった時には彼は持船を指揮していたし、また日本の法律によって官吏と同等の権利を持っていたので、われわれは彼を隊長と呼んでいた。だからこの物語では、彼のことをこう呼ぶこともある。

彼はよく私の話を呑み込んで、私から、

「国後島の隊長の言明によると、ゴロウニン艦長とムール以下全員殺害されたんだよ」というと、彼は何度も私の言葉を遮って、

「そうじゃない、甲必丹、ムールそれに五人のロシヤ人は健在で、松前市で立派な待遇を受けているんですよ。一同はたった二人の役人しか附かずに、市中を見物できるんですよ」と答えるのであった。

「われわれと一緒にロシヤへ行こう」と申し出ると、彼は驚嘆すべき冷静ぶりで、

「ようがす、覚悟しています！」と答え、ただロシヤへ行っても私と別れないようにしてくれとだけ頼んだ。この点は私も大丈夫と断言し、その上来年の春には帰国させることを確言してやった。すると彼は、この思いがけない身のなりゆきをすっかり諦めた。

一方、本艦に残っていた四名の日本人はロシヤ語は一語も知らず、従って何の役にも立たず、しかも壊血病に冒されていて、カムチャツカで二度目の冬営をやったら生命も危いと思われたので、

既に離艦した仲間と同じ幸運を授けるのが正常だと考えた。だから私は必要品をすっかり与えて、この日本人たちを上陸させた。(彼らは単純だから、こちらからしてやった恩恵に対して感謝の念を持ち、これまでと違って、よいロシヤ人觀を同胞間に広めるだろう)と私は考えたのである。

四人の日本人を釈放したので、私はその代りに日本船から同数の人間を手許に取って置きたいと思った。だから隊長の身の廻りの世話をさせるために必要だという名目で、こう申し出た。

「手下の水夫のうちから、誰でも好きな者を選んでお前の世話をさせるように云いつけて貰いたい。それから人選が済んだら本艦に來り移らせて貰いたい」

しかし彼はそれを承知しないで、かえってこう頼んだ。

「水夫どもは無智蒙昧で、ロシヤ人をひどく恐がっていて、きっと大変に悲しむに違いありませんから、水夫は連れて行かないようにして下さい」

その頼み振りがあんまり熱心で、(こちらの捕虜たちは本当に松前市にいる)という私のこれまでの確信もいくらかぐらつき出したので、私は断乎として云いつけた。

「俺はお前の船から四人を連れて行かねばならないのだ」

すると彼は、「一緒にわしの船に來て下さい」とだけ頼んだ。

一緒に向うの船に着くと、彼は全乗組員を自分の室へ呼び集め、簡素で清潔なマットの上に敷いた細長いクッションの上に足を折って坐り、私にも傍に坐るように招じた。水夫たちは皆、彼の前に膝まづいて坐っていた。彼は一同に向って長々と前置きの話をし、

「お前たちのうちから何人か露艦に乗ってわしと一緒にロシヤへ行って貰わねばならぬ」と申し渡した。

すると世にも感激的な場面が展開された。大勢の水夫が、頭を下げて船長の方へにじり寄り、まざまざと情を殺した仕ぐさで、何か囁きかけ、殆んど全部が涙を浮べていた。当の隊長も、これまで平然と剛毅な態度を保っていたが、思わず涙を浮べた。私も自分の考えを実行したものかどうか決しかねていた。しかし後で一人一人について、わが方の捕虜が本当に松前にいるという証言を取る必要は、その実行を要求するのであった。ただ私として大いに安心出来るのは、将来後悔する理由のないことであった。というのは日本の隊長はその身分から見ても特殊の生活に慣れ、アジア的贅沢に甘やかされているので、手下の日本人がいなければ大変に不安を感じ、不自由を覚える

であろうが、彼らを連れて行けばその日本人が二人ずつ交替で彼に附添えるからであった。

次に、日本の隊長は私が彼をロシヤへ連れて行く理由も、また彼の到着する数日前に国後島の長官から良左衛門を通じてわが同胞の身の上につき与えられた情報の内容も判ったので、私はこれらの点について出来るだけ詳しい手紙を書いてくれと依頼した。彼は私の目の前で大変に長い手紙を書き、上記の事情を詳しくたずね、また本艦の名や、国後島到着の時間や、良左衛門の人となりなどをいろいろとたずねては書きこんで行った。

それが終ると高田屋嘉兵衛は自分の選んだ水夫たちを連れて、本艦に乗り移って来たが、その様子は遠い国に連れて行かれる捕虜のようではなくて、まるで自分の持船に帰るような態度であった。この日本人たちに、(ロシヤ側では自分たちを敵対国民とは思わず、友好国民だと認めているけれども、二、三の不都合な事情があったばかりに十分な協調が断絶したのだと考えている)と思込ませるために、われわれは出来るかぎりの手段を講じた。

この日私の招きで、上記の日本船から一人の日本婦人が来艦した。これは高田屋嘉兵衛の居住地の箱館市と択捉島との間の往復に常にお伴をしている女である。彼女には本艦も異国人も見るもの皆新らしく、ことに彼らが敵と思っていたロシヤ人が優しく、親し気にもてなすのが不思議そうであった。われわれにとっても日本の女を見るのは、それに劣らず珍しいことであった。来艦した当座は彼女は大変に怖じけづいて見えた。私はすぐに嘉兵衛に頼んで、彼女を私の艦室に通させ、私自ら立ってその手を取って部屋に入れた。ドアのところでは彼女は日本の習慣通り藁の靴を脱ごうとしたが、私の艦室には絨毯も畳もないので、「私は手振りでも、そんな変な礼儀は守らなくてもよい」と知らせた。居室に入る時、彼女は両手の掌を上に向けて頭にかざし、それからわれわれに向って低くお辞儀をした。私は彼女を安楽椅子のところへ連れて行った。すると嘉兵衛が、「それに腰掛ける」と云ってやった。

幸い本艦には若くて、相当な美人の下級軍医夫人が乗組んでいて、この思いがけない婦人の訪問客をもてなしてくれた。日本の女はこのロシヤ女を見ると、元気づいた様子で、快活になり、二人はすぐに仲よしになった。愛想のよいロシヤ女は、どんな女でも好きな、着物を見せることで、日本女を接待した。日本の女は如何にもお洒落らしく、非常な好奇心を示して、すっかり着物を拝見した。そのうちの何枚かは自分でも掛けて見て、気持のよい微笑をうかべて、驚異を示した。しかし彼

女が最も驚かされたのはロシア女の色の白さであつたらしく、(人工的に色をつけたのではないかと疑った様子で、手で顔に触って見ては、笑って何度も「ヨーイ！、ヨーイ！」と繰返していた。私は日本女が珍しい着物に見とれているのに気づいたので、御機嫌をとり結ぼうと、鏡を差し出した。ふとそれを見やった彼女は、わざとしたように後ろに寄添っているわがロシア女の色の白さと正反対な自分の顔を見て驚いた。彼女は心から人の好い仕草で、「ワライ！　ワライ！」と云いながら、両手で鏡を押しつけた。ところがどうして彼女はなかなか人好きのする女であつた。顔は少し日にやけているが、正しい輪廓で少し長目で、口は小さく、漆黒に輝く粒ぞろいの奇麗な歯並で、眉は細く黒くて筆でかいたようにすんなりと伸び、同じように黒くて窪みのない艶のよい眼がその下にある。髪はこの上もなく黒く、ターバン型に結って、鼈甲櫛のほかには何の飾りも使っていない。身長は中背の細身で、なかなか姿がよい。服装は極く薄く綿を入れた、ロシアのガウンのような寛(ゆるや)かな長着を六枚重ね、その一枚一枚がずっと下の方で別々の帯で留めてあつた。着物は帯から下は開け放しになっていて、一枚一枚色が違って、一番上の着物は黒であつた。話しぶりは間がのび、声は悩ましかった。それが皆、表情に富んだ顔の動きと一緒に、人好きのする印象を与えるのであつた。年は十八以上とは思えなかつた。

われわれは蜜入り菓子と上等の茶を出した。彼女はいかにも満足そうに飲んだり食べたりした。帰る時には少しばかり贈物をしたが、彼女はそれを大変によろこんでいた。別れる時、私はこちらのロシア女に彼女と接吻したらとすすめた。日本の女はロシア女の気持をさとって、接吻をうけ、大変に笑った。彼女は本艦を離れると、国後島の隊長に嘉兵衛の手紙を届けさせるために仕立てた小舟に乗って、真直ぐに部落の方へ向つた。

私としては、こちらで日本船を捕獲した意図についてこの説明を送つたから、国後島の長官は私あてではなくとも、少くとも高田屋嘉兵衛あてに必ず返書をくれるものと想像していた。いやむしろ(良左衛門が部落に拘禁されているなら、私の名義で嘉兵衛に手紙を書かせた通り、当の良左衛門を通訳のため本艦に派遣するに違いない)とまで期待していた。ところが全く予期に反する結果となつたので、われわれは(個々の隊長がわが方と折衝を行うことを日本政府が禁止しているのだ)と考えた。というのは、日本側では返事をする代りに、その翌日水を汲みに陸岸へ行って帰艦中のわが方のボートに向つて、四門の大砲で実弾を発射したからである。それにも拘わらず私は嘉兵衛

の陳述については自分の見解を変えなかったのみか、早急に何かやって見て大事を誤りたくはなかったのも、前述の通りカムチャツカへ行って嘉兵衛から万事詳しく聞き出すことに決心し、日本側のこの空疎な射撃ぶりを却って軽蔑していた。

その時ちょうど順風が吹き出したので、私は抜錨の信号を出させた。その直前に嘉兵衛から私に、持船の水夫どもに來艦させて見物させたいから許可してくれと頼んだ。私が許すと、水夫たちは全部代り番こに來艦し、珍らしい物は片っぱしから用途をたずねた。ことに彼らは本艦の索具に目を見張って驚き、元気な者は檣頭に登り、最も勇敢な連中は檣頭横桁にまで登った。私はこの水夫たちに、自室に來いと命じた。部屋に入る時、彼らは私自身が室内にいる時と同じように敬礼した。部屋では銀の杯で、ロシヤのウオトカを飲ませた。おかげで水夫たちは一段と大胆に陽気になった。そしてこちらの水兵たちと話をしようとして手振りを始めたり、羅紗服や、きらきら光るボタンや、色物の頭巾に見とれたりして、水兵たちの頭巾と日本の小間物とを交換したりした。

高田屋嘉兵衛は後甲板に空樽を幾つか見つけて、それに自分の船から水を入れて來ましようとして申し出た。水夫たちは早速その樽を全部持って行って、きれいな清水を一杯入れて來た。数時間前までは敵だと思っていた人々が、われわれとこんなに仲よくしているのを見るのは愉快的なことであった。この善良な日本人たちは、われわれに別れを告げると、唄を歌いながら自船に帰って行った。

夕刻、本艦とブリック船ゾーチック号は海上に乗出した。すると早速、部落内の全砲台から実弾をもって砲撃を開始した。向うでは、こちらが敵意を持って部落に近づかんがため、帆を上げたのだと判断したに違いない。しかし距離が極めて遠いので、そんな徒らな砲撃は憫笑を催させるだけであった。日本の役人(高田屋嘉兵衛)も大いに笑って、

「国後はロシヤ人には悪い場所です。長崎の方がいいです」と云った。

その翌日は逆風だったから、部落から五哩以上離れた海峡に碇を入れて、出帆直前に部落へやってそのまま向うに抑えられていた小舟が嘉兵衛の船へ立ち戻って來はしないかと、望遠鏡をのぞいて見た。しかし船長は云った。

「島内から全く見えない所まで露船が行ってしまわなければ、あの囃会船はあのまま会所の方に抑えて置きますよ」

九月十一日(わが八月十八日)雨艦は抜錨し、カムチャツカ半島への直航コースをとって、間切り始めた。この航海中、両船は猛烈な暴風雨のため大いに苦しんだ。晩秋の頃になると、高緯度の地方ではどこへ行っても、暴風が危険至極なのである。ことに十二日には両艦は極度の危険にさらされ、神助によって辛うじて最後の破滅をまぬがれたのである。

同日正午頃、暴風が吹き出し、やがて怖るべき嵐になった。その時、本艦の風下には、松前島と色古丹島の間横たわる低い島々が列を作っていた。本艦はよく大帆を支え、相当な速度を出しているかに見えたが、それにも拘わらず両艦は潮流のため見る見るうちにその低い島の方へ押しつけられて行った。大海から国後、色古丹両島の海峡に向って、風向きのままに襲いかかって来るこの大波では、とても錨泊の見込はなかった。そしていよいよ破船の危険に直面した。本艦がその危険な低い島に近づいていることは、測鉛によって、刻々と判るのであった。午後三時半頃には、水深は十八尋から十三尋に減った。本艦は横流しに島の方へ吹き寄せられていた。この難局に面して、われわれは難破を避ける最後の手段たる投錨を執行することとして、錨を入れた。しかしその錨は掛らなかった。水深は更に二尋方減じ、地盤は岩石まじりの砂地であったが、更に第二の錨を入れた。それにも拘わらず本艦は波頭を舷側にうけ、錨は海底をずるずると引きずられるのであった。そこで直ちに主樁と、ありったけの帆桁を降した。すると錨が掛って、本艦は二つの錨に繫留された。かくて神意は再びわれわれを眼前の危難から救い給うたのである。

日本の船長は私の艦室に同居していたので、意志の疏通を図るに適等な機会をたびたび提供してくれた。私はゴロウニン艦長の安否を日本の艦長から聞き出そうと永いこと骨を折った。彼はゴロウニンの位階と姓名を注意ぶかく聞いて、いつも「知りません」と答えるのであった。そのうちに日本人の耳で聞くとロシヤ名が大変に聞きとり難いことに気づいたので、私はゴロウニン氏の名をいろいろとゆがめて発音して見た。とうとう彼は私のあとをつけて大喜びで、「ホヴォリン」と云ったので、私もこの上もなく喜んだ。

「その方ならわしも聞きました。あの方も松前に居られるということです」と彼は続けた、「日本ではあの方をオロシヤ第一流の高官、つまり大名と崇めています」

それからこの善良な日本人は、ゴロウニン氏を見たことのある日本人たちから伝え聞いたと云って、ゴロウニン氏は丈が高く、堂々たる風貌で、ムール君ほど快活ではなく、最上等の煙草をきちんと

渡すことになっているけれども氏は喫煙を好まない——と説明した。またムール君は煙草が好きで、日本語がかなり判ると云っていた。

かようにわが同胞たちの特徴を残りになく描き出して貰うと、われわれは一切の疑惑を脱却でき、この日本人を通じてかくも喜ばしい知らせを送り給うた神の深慮を有難く思った。のみならず私としては、わが同胞の運命に関するあの良左衛門の虚偽と悪意にみちた宣言のため、むらむらと兆して来た決死の対日行動の実行に踏はずさなくて済んだことも、有難かった。

私が聞き出した所によると、この日本人の捕虜は毎年択捉島に赴き、いろいろな日本品を同地に運び、同地から魚類を積んで帰るのであった。しかし私としては大いに驚かされたことは、嘉兵衛が良左衛門を知らないことであった。ひょっとしたらこちらの発音が悪くて良左衛門の名が聞きとれないかも知れないと思ったので、私は良左衛門の直筆で私のノートに書かせて置いた名前と、その出生地たる松前市のところを嘉兵衛に見せた。嘉兵衛は至って明白にそれを読んだ。

「そう云う名前の商人はかつて択捉島にいたことはありません。私は択捉島の物持ちは昔から今まで皆んな知っています」と云って、その名を一々あげた。

そこで私は良左衛門の持っているだけの名前をすっかり発音して、ナガチェマ・ドモゲロ・ホロジと云った。高田屋嘉兵衛は遂にその最後の名を聞きとがめ、びっくりして、笑いながら叫んだ。

「五郎次なら知っていますよ。彼奴がオロシヤに行つて★親方だと名乗ったのですか？」

★ ロシヤでは郡警察署長、またはアイヌの長官。

「そうだ」と私は答えた、「良左衛門は大きな地所を持っていると云う話も聞いたよ」

「いやいや五郎次なら函会船一艘持ったことはないのです」とこの日本人は反駁した、「前の主人に仕えていた頃は、彼奴の身分は漁業の監督、つまり番人だったのですが、字がうまいものだから書記の仕事をすっかりやっていたのです。生れは松前じゃなくて、南部藩で、アイヌの娘と夫婦になっていました」

嘉兵衛はいかにも見さげ果てたと云わんばかりにこの言葉をはきながら、手を自分の首筋にあてて、良左衛門が日本役人の名を騙ったということが日本に知れたら、打首だと真似をして見せた。

こうして良左衛門の氏名詐称事件が思いがけなくも暴露されると、(本艦から国後島の隊長の許に送った日本人たちは、良左衛門の復讐心を満足するために、きっと彼の狡猾な指図通りに動い

たに違いない)ことが判って来た。しかし手紙を持たせてやった日本人(与茂吉)が帰らなかったのと、良左衛門に同行した男(忠五郎)が部落の方へ去ってしまったことは、彼らが帰艦を恐れたのだと私は判断していたが、今となればそれが誤りであったことが判った。

日本の船長の説明によると日本臣民は如何なる事情によるのを問わず、一年以上外国に行った者は、その帰国後、家族の許に帰ることを法律で禁止し、江戸に送ってその情状を調べることになっているので、多くの者は家族と同居する希望もなく、生涯を江戸で送るのである。一方われわれの送還した漂流日本人たちはカムチャツカに一年は滞在したので、彼らが逃げ去ったのはひとえに右の法律上の理由によるものと思わねばならない。

この嵐の日本沿岸を離れ、千島諸島の高緯度のところに上り、有名な航海家ラペルーズの乗艦の艦名をとって命名したブツル海峡(得撫水道)の見える地点まで来た時、よく晴れ、相埒に都合のよい天気となったので、これ幸いと天文観測により数地点の測定を行った。われわれはわざとこの広い海峡を通過してオホーツク海に出、これ以北の幾つかの島々の西岸を視察し、雷公計、松輪両島間の新発見の海峡を通過して再び太平洋上に出た。この海峡の名はどの海図にも見えなかったから、われわれはこれをゴロウニン海峡と命名して、今回の航海の主目標であったわが不幸な艦長の記念とした。

九月二二日(わが八月二九日)カムチャツカ半島の高山(死火山)が見え出した。その頂上はもう雪に蔽われていたが、平地はまだ眼に快い緑に彩られ、気温も相当に暖かかった。嘉兵衛は、今時分に得撫島や択捉島に航海すると、海岸にはもっと雪が降っていて、寒気もずっと身にしみることがある、と告白していた。

順風に乗ってアヴァチャ湾口に近づいた時には、(明日はペトロパヴロフスク湾に入れるぞ)と楽しんでいたが、風向が変わって、陸岸からまともに吹き降ろして来たため、両艦は沖合に吹き戻されてしまった。それから苦心惨憺、参度まで湾口に今一息という所に近づきながら、十月参日までは遂に入港できず、ある暗夜のごとき、すんでのことで難破するところであった。

湾内には参隻の船を見かけた。そのうちの一隻はオホーツクから食料品を運んで来たオホーツク港の運送船で、あとの二隻はアメリカの国旗をかかげ、アメリカ合衆国人ドベル氏の持船であった。この両船の積荷もやはりドベル氏が荷主で、その一部は広東で、他の一部はマニラで積んで来た

ものである。両船は広東を出てカムチャッカに向う途中、マニラに寄って来たのである。そのうちの一隻には当のドベル氏が船長の資格で乗組んでいた。氏は支那その他の物産豊かな隣接各国との交易という、当地方年来の希望を満たさんとする見上げた目論見を抱いて来航したのである。

私が一等気を使ったのは、わが善良な日本人を一刻も早く上陸させることであつた。破は間の悪い今回の長航海に不安を感じて極度に疲れ、悲観しているとさえ私考えていた。しかしあとになってその話を打ち開けると、彼は全然別な理由で薙ぎこんでいたことが判つた。われわれが陸岸から来艦した士官や友人たちの祝詞を受け、無事遠征修了を共に喜んでいた時、わが日本の船長は自分の運命に不安を感じ始めたのである。彼は自分の国の法律からして、(自分もまた、ロシヤの囚虜が日本で受けているのと同じような嚴重監禁の身となるのだらう)と想像していたのである。だから私と同じ家はおるか、同じ部屋に入れられた時の彼の驚きようは大したものであつた。

十月一二日、全士官も乗組員一同も、必死と思われた破滅を参度も救って頂いた神の恵みに感謝するため、祈祷祭を催して、全員上陸した。

ゴロウニン艦長以下同厄の同僚たちを救わんがために企てた第一回の日本沿岸航海はこれを以って完了した。この航海の成果は、われわれが生捕って拉致して来た高田屋嘉兵衛から、わが同胞は生存しているということを聞き出したことである。われわれとしてはこの喜ばしい吉報は、少なからぬ収穫であり、われわれの苦労に対する大きな酬いだと考えた。